

ビクトリアについて

後期ルネサンス時代を代表する作曲家のひとりトマス・ルイス・デ・ビクトリアは、1548年頃スペイン中部のカスティリヤ・ラ・ビエハのアビラの司教管区で生まれました。また、ここはスペインの神秘主義的宗教詩人として名高いサンタ・テレサ・デ・ヘスース（聖女テレジア、1515～1582）、サン・ホアン・デ・ラ・クルース（十字架の聖ヨハネ、1542～1591）の生地でもありました。この人たちとはビクトリアにとって精神的な友であったようです。

ビクトリアは生涯20曲のミサ、40曲のモテトゥスをはじめ全部で180篇ほど作曲していますが、これらはスペインに居たために生まれたのではないかと思われます。1560年にフェリペ二世から認可がおりてローマを訪れることができました。そこで彼はロヨラによって創設されたイエズス会の神学校コレギウム・ゲルマニクムにはいりました。

スペインを去る以前にすでに聖職者に任命されていましたし、この学校の聖歌隊指揮者からさらにサン・タボリナーレ教会の聖歌隊指揮者となる以前に、すでにフランス・フランドル楽派の線に沿って豊富な音楽を受けていたに違いないのです。

しかし、深い宗教精神から、1578年ローマ市内のサン・ジロラモ教会に引きこもり平の司祭となってしまうのでした。ここで彼の作品の中でも感動を呼ぶ「聖週間聖務曲集（1585年）」、「死者のためのミサ曲（第1のレクイエム）（1583年）」を作ったのです。

ビクトリアは満ちたりた生活の中にもスペインへ帰ることを念願し1585年頃故国スペインの地をふむことができました。スペインではマドリードにあるデスカルサス・レアレス修道院で余生を送っていた皇太后マリアとその令嬢マルガリータに仕えながら名儀楽長、オルガニスト司祭として暮らしました。

そして彼の最後の作品となったのが今回演奏する「ミサ・プロ・デフンクティス（死者のためのミサ曲）」で通称「皇太后マリアのためのレクイエム」です。1603年に75歳で亡くなった皇太后マリアは、スペイン王カルロスI世（神聖ローマ帝国皇帝を兼任しカルルV世としても知られる）の娘で、フェリペII世の妹にあたり、神聖ローマ皇帝マクシミリアンII世の妃であった人でした。宗教心の厚い人として知られ、かねて敬愛を寄せていたビクトリアは——1592年以来作品を発表していなかつたのにもかかわらず——全力を打ち込みこの曲に取りかかったのです。亡くなった人の靈に代り、ビクトリアみずから「白鳥の歌」と述べています。

詳しく言うとこの作品は1605年にマドリードで出版された「オフィチウム・デフンクトルム」（死者のための聖務曲集）と名づけられ、このミサ曲のほかモテトゥス（モテット）、レスポンソリウム（応唱）、レクツィオ（朗誦）が一冊をなしています。

死者を弔うためのミサ曲はラテン語によるその歌詞の最初の句、すなわち「安息を」の意をとて「レクイエム」と呼ばれるのが普通です。その後1611年8月27日、ビクトリアは生涯独身の身を安らかに神の手へ委ねたのです。

新刊案内

佐々木基之著

『耳をひらく』——人間づくりの音楽教育——

音楽によって万人を幸福へ導く独特の教育法を創案した著者が“分離唱”の指導法を述べる。音楽早期教育に悩むお母さんや、音楽大学生にとっても福音の書であり、音楽に関心のない人も楽しく読める。（1,600円 ￥200円）

〒102 東京都千代田区1番町9

T E L 03-263-2940 振替 東京 0-33724 柏樹社

（梨大合唱団でも、お取次ぎいたします。）